

ひょうたん島通信

大槌発! 第42回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



北限のウミガメたち

福岡拓也 大気海洋研究所 海洋生命科学部門
行動生態計測分野 博士研究員

ひょうたん島通信第10回（2012年発行/1439号）に大槌でのウミガメ調査復活を目指して博士研究員とともに送り込まれた新入大学院生がいました。彼はその後、地元漁師をはじめ多くの人々に助けられながら三陸へやってくるウミガメの生態研究を進め、昨年3月に博士号を取得しました。そして、博士研究員となった今も、大槌でウミガメ調査の日々を過ごしています。そう、私とその時の新入大学院生です。

2012年の調査再開以降、地元漁師の協力によって震災前と同様に毎年40～50頭のアカウミガメと10～15頭のアオウミガメが手に入るようになりました。そして、震災前から行なっているバイオリギング研究（動物に小型の記録計を装着して行動を調べる手法）によって、大槌を含む三陸沿岸域にやってくるウミガメの生態が徐々にわかってきました。

従来、アカウミガメは海底でウニや貝などの底生生物を食べていると考えられていました。しかし、甲羅にビデオカメラを取り付けて野生下での行動を撮影してみると、海底で餌を食べる映像はほと

んどなく、大半は中層でクラゲなどゼラチン状の生物を食べていました。また、従来は植物食とされてきたアオウミガメでも、海藻に加えてクラゲやサルバといったゼラチン状の生物も食べる雑食だとわかりました。大量発生して網を壊すなど厄介者扱いされるクラゲですが、消化しやすいその体は大槌へやってくるウミガメ類にとって重要な栄養源なのかもしれません。

また、ビデオ映像には本来餌ではないレジ袋などの海洋ゴミを飲み込んでしまうシーンも数多くありました。飲み込んだゴミが腸に詰まってウミガメが死ぬという話を聞いたことがある人も多いかと思いますが、ウミガメのフンを調べてみると、こうしたゴミのほとんどが排泄されていました。さらに、ビデオ映像では鳥の羽や木片なども飲み込んでい

ました。つまり、ウミガメは口に入るものならとりあえず何でも飲み込んで、消化できるものは自らの栄養にし、消化できないものは排出するという戦略で生き延びてきたのだらうと推察しています。この他にも、夏にやってきたウミガメは冬には500km以上南の海域で越冬するなど、ウミガメの生息域としては高緯度に位置する大槌での調査は、彼らの新たな生態を知ることができる貴重な場所だと感じています。この事実を広く伝えることで、大槌が世界的にも有名な調査海域として認識される日を夢見て、今後

大槌カメラ班調査中の図（阿部貴晃氏提供）。



も研究に励んでいきたいと思っています。

ました。つまり、ウミガメは口に入るものならとりあえず何でも飲み込んで、消化できるものは自らの栄養にし、消化できないものは排出するという戦略で生き延びてきたのだらうと推察しています。この他にも、夏にやってきたウミガメは冬には500km以上南の海域で越冬するなど、ウミガメの生息域としては高緯度に位置する大槌での調査は、彼らの新たな生態を知ることができる貴重な場所だと感じています。この事実を広く伝えることで、大槌が世界的にも有名な調査海域として認識される日を夢見て、今後

調査船「弥生のつばやき」

ラグビーW杯2019日本大会



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早4年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のびーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

年が明けて早ひと月。今年は平昌五輪、サッカーW杯ロシア大会など、大きなスポーツイベントが目白押し。どれも今からワクワクしていますが、もっと楽しみなのは、遂に来年に迫ったラグビーW杯日本大会です。観客動員数で夏季五輪、サッカーW杯に次ぐ世界三大スポーツイベントの一つが、ここ大槌湾に面する釜石・鶴住居地区の会場で行われるのです。大会の成功、日本代表の活躍はもちろんですが、国内外から大勢の人々が大槌・

釜石を訪れ、三陸被災地域が大いに盛り上がることを切に願う今日この頃です。

そのスタジアム建設も含めて、様々な復興関連事業は、ラグビーW杯を一つの目標として「2019年」を合言葉に進められてきました。来年、復興関連事業・W杯が終われば、関係者や観光客は街から出ていき、街は本来の姿に戻ります。街としては、その後こそが勝負どころ。2019年はW杯の年、そして、真の復興・再生に向けて船を漕ぎ出す年となるのか

もしれません。



防潮堤と水門の隙間から見える建設中のスタジアムとJR釜石駅に設置されたカウンタ。建設工事の音は、来年、試合の歓声に変わります。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）